明治廿七年十月二日印刷
明治廿七年十月五日發行

婦人衛生雜誌

第五拾九號

私立
大日本婦人衛生會

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

大日本婦人衛生雜誌
第五拾九號
目次

講演
ペスト病の原因取調べに就て　醫學博士　北里柴三郎君
衛生叢談
◉長壽者來歷
◉北里青山兩博士歡迎會
◉從軍夫卒の救護
◉仁川港在留婦人の篤志
◉防寒の必用品
◉南京虫の發生
◉某村と唐辛
◉法印某の衛生歌
◉廣告
其他數件

大日本婦人衛生雜誌
第五拾八號
目次

講演
◉疾病の原因及外科治療に就て（承前）　醫學士　田代義德君
◉河豚魚の話（承前）
◉燈火の話　ドクトル　飯盛挺造君
衛生叢談
◉長壽者來歷
◉卄六年結婚離婚數
◉體育
◉赤痢病大猖獗
◉赤痢病流行の爲め授業を止む
◉北里青山兩博士の歸京
◉府下三病の流行
◉病院に於ける電話機の効用
◉生兵法大傷の本
◉下水排除の急務
◉廣告數件

婦人衛生雜誌第五拾九號

講演

（明治二十七年十月五日發行）

●ペスト病の原因取調に就て

醫學博士　北里柴三郎君

香港地方に發生したるペスト病の原因取調べに就て北里氏より本會へ同報告書を送附せられたるが少しく高尙にして理解し易からざる處あり依りて此演說を大日本衞生會に請ひ登載することゝなせり一讀以て知遂することを得べし

諸君、今晩は當私立衞生會第百五常會を開かれますに就きまして、私に香港に於て取調べた處のペストのことに就て一席の御話を申上げるやうにと云ふ會頭、副會頭閣下の御頼でございました、此ペストに就て取調べた復命書は既に內務大臣閣下に差出して置きましたので、官報其他新聞紙で皆さん御承知でもございませうけれども、實際の處の景況や何かを併せて今晩は少々御話をしやうと考へます、

大學教授の青山胤通君と共に今度香港に發生しました處のペスト病を取調べることに就きまして、派遣の命を蒙りまして、六月五日に當地を立ちまして香港に着きましたのが丁度六月の十二日でございます、着きました時にはマダなか／＼病勢が盛んでございまして、現に香港の市中で支那の人足等が道路でペストの爲めに行倒れをするといふやうな慘狀を見る位な時でございました、日に新患者

の六七十名もあるといふ位の話で、ナカ〳〵盛んの時でございました、それで私等のペストに就て探究することも餘程都合を得まして、十分に探究する便利を得ましてございます、且又香港の政廳及香港の撿疫に從事して居る醫員諸君の非常なる好意を得ましたからして、解剖の如きものも十分に之をすることが出來ましたし、又其外病人に就て直に研究しやうと思ふことは先づ日本で斯ういふ研究をすることから見れば却ッて都合好く研究の便を得たと感じましてございます、私等が彼方へ參りまして日本領事の手を經まして香港政廳へ其事を依頼しました、マダ其時には日本政府から政廳の方に通知もございませぬ時でございましたに拘はらず領事の一片の依頼で政廳の方でも快く引受けて呉れました、さうしてケンチンジタウンといふ所に避病院が立ッて居りますのを貸して呉れました、今度先づ四個所にペストの避病院を建てましてさうして一番餘計に患者の這入ッて居りますのは東華病院と云ふ病院であります、是は支那の醫者だけで受持ッて居る、病院で分病院本病院と二ッに分けてあります、是は兩方とも一番餘計患者が這入ッて居る私等が參ッた時は二百名近く患者が這入ッて居りました、それから英吉利の醫者が受持ッて居る避病院がケン子ンジタウンと云ふ所の東華病院の直ぐ側に一の警察分署がございます、其警察分署を避病院としてある、其處で大概三十名から四十名まで位患者を入れてある、それと今一つは新聞で御存じでございませうハイジヤと云ふ船の病院、是は船を病院に造ッて――船であッたのを病院にしたのではございませ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ぬ、病院に船を拵へたのでございますから其船は動きはしない、唯浮いて居るだけで、マルで病室の體裁に拵へてある船でございます、船の方に居りますのは重もに白人種歐羅巴人の病氣に罹ッた者を皆船に入れてありますから是は極く僅で私等が往ッた時には十名内外ほか入れてなかッた、

ケンチンジタウンと云ふ所の警察分署の避病院を私等に貸して呉れまして、避病院の中で研究することも出來ましたし又其處に這入ッて居る病人を自由に取扱ふことの便宜を與へて呉れましたから大層都合が宜しうございました、其病院に這入ッて居る患者の種類はどう云ふ人かと云へば素より支那人が多うございますが、此支那人は歐羅巴人と親しく呢んで居る處の支那人で則ち歐羅巴風に歸依して居る處の支那人或は基督教に這入ッた支那人、兎に角歐羅巴人と密に交際して居る處の支那人が其病院に這入ッて居る、則ち歐羅巴人に治療して貰ふことを好む處の支那人であります、それと印度人其外葡萄牙人とか或はマカオあたりに居る葡萄牙と間の子の人種、それから日本人、斯う云ふ風の種類の患者が其病院に這入ッて居るそれでございますから例へば指の先から血液を取るとか何とか云ふことも、唯の支那人を扱ふより見ては極く都合が好く說諭もし易うございますし、承諾することも早うございますからして餘程便宜を得ました、併し單り解剖に至ッてはナカ／＼困難であッた、なせかならば支那で支那人を解剖することは餘程困難の樣子でございます、併し是は英吉利の香港の病院の規則として、病院に這入ッて死んだ患者は其身寄りの者にも何も通知しない

で、醫者の手で直ぐに解剖してサウして其上で引渡すと云ふが、是が一般の香港の病院の規則になッて居る樣子でございます、併し今度の際にはナカ〳〵一時新聞にございました通り支那人が非常に沸騰しまして英吉利の醫者をプンナグルとか、或は白人種に向ッて非常に攻擊をするやうなことでございますから、英吉利の醫者も一時手を引いて居りまして、解剖や何かは極く秘密にして居ッたでございますから、私等の參りました迄には漸く解剖は三体かそこら外行ッて居りませぬから解剖の事は一向手を着けて居らなかッた、然るに私等の一行が彼方に着きましてから解剖の便利も大變都合好く與へて呉れました、サウして日々解剖することが出來ました、併し其解剖といふことは極く內證であるので若し是が支那人に見付けられた日には直ちに私等は打殺される有樣でございますから、一切支那人には固より病院に居る支那人の小使にも知らさぬ、支那人が看病人に來て居るが、其支那人にも知れぬやうに內證にしなければならぬ、隨分困難の業であッたのであります、それを行ッて呉れましたのは英吉利人の間の子のやうな人が警部補をして居ります其人が大層世話をして種々解剖に導いて呉れました、大變都合が宜しうございました――少し御話が他に渉ますやうでございますが、私等が困難を極めた處の狀を少々御話して置ます、解剖をすると云ッてもナカ〳〵オイソレと云ッて屍体を小使に運ばせて、ヤレ水を持ッて來て呉れと大きな顏をして、病院で解剖する譯にはナカ〳〵往かぬ、デ皆病人が死にますると支那人の屍体も矢張り皆歐羅巴人の通り

寢棺に入れます、寢棺の中に石灰をヅッと撒いて、サウして病人が死にますると病床に――病人の床の側に寢棺を擔ゐて往ッて其處で棺の中に入れて仕舞ふ、入れて蓋を蔽ふ、サウして今度はそれを以てペストで死んだ屍体を葬る處が別に一二個處設けてございます、ソコに皆運搬するやうな風を支那人に見せて、サウして內證で病室に……警察分署が則ち病室で、其病室の後ろの方の分署に屬して居る處に小さい家がございます、臺處とか又物置とか云ふ附屬室の一の部屋にそれを持ッて行まして、サウしてそこで又再び棺を明けて其處で解剖する、解剖すると云ッても解剖臺も何もありませぬ、棺桶の蓋に屍体を截て……部屋と云ッても、八疊敷位の所で、床の上に乘ると丁度此上(演壇を指す)に乘ッたやうにブク〳〵してオッコチさうな所であります、窓が一個所あッて入口が一つある位で、支那の人足が窓の下に來ますから多くは窓を閉めて置かなければならぬ、暑いのに窓を閉めて――外から覗かれますから――其中で解剖するのでございますから隨分解剖するに困難でございました、例へば一ッ內臓を引出し、心臓を引出して洗ッて見やうとしても、水がなかッたり何かして、ソッと戶口を明けて內證で水を汲んで來て洗ッて見るといふやうに隨分困難を極めた、解剖の困難を極めたことは是迄ない非常の困難をして解剖をした其困難なる解剖の主任は青山氏が擔當しまして、初めから仕舞まで青山氏が解剖されたで實に此青山氏の解剖をされた勞苦といふものはナカ〳〵大いなるものでございました、併し氏がそれ丈骨を折られまして、それに隨ふ宮本君そ

れに今日見えられて居る木下君等の骨折は實にたいしたものでございます、それから私の方の石神君それから又私共も暇の時分には往ッて手傳をしました、それ丈の骨折をした骨折賃はございまして、幸にして吾々の目的を達することが出來ました、然るに不幸にして青山石神の兩氏は此病に冒されました、實に吾々一行の不幸も此上ない不幸でございましたが、先づ幸にして兩氏共に全快に赴きましたのは、先づ不幸中の幸でございました、其病氣に罹られた摸樣などは又あとで御話しやうと思ひます、

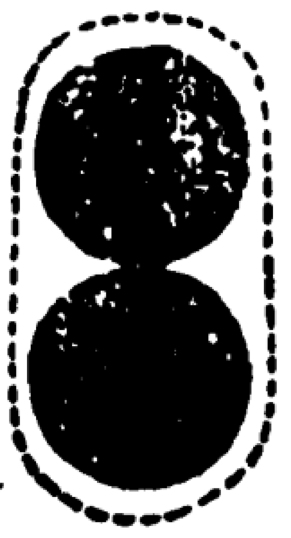
私等の研究を始めました時は丁度六月十二日の朝着いて、十二日に直ぐに領事の手を經て政廳に賴んで十三日に醫者に逢ひまして、サウして十四日からケンチンジタウンに研究の場所を見付けて貰ひまして其處で研究を始めました、十四日に直ぐに一の病体を解剖することが出來まして青山氏が之を解剖しました私は今度は重もに原因の方を取調べる方を分擔して居りましたから、始終解剖をしますれば直に其一片の內臟及び組織等を取て、サウして之を顯微鏡で視て研究することは私が主として居ッた、臨床上の實驗と解剖上との事は是は他日青山君が歸られました上で委しい報道があらうと思ひます、依て私は私が分擔した丈の御話を致します、

此ペストといふ病氣はドウいふものかと云ふに、總て不明の傳染病に就て原因を取調べるとか何とか云ふ時は何時でも是迄分り來ッて居る原因の何の病氣に一番能く似て居るかといふことを、初めに考へるのが是が微菌學者則ち傳染病學者が不明

の傳染病に就て研究する一番初めの考でございます、それで私が彼方に參りましてから僅か一週間位にして此原因が分ッたといふことを報告しましたので、或る人等はドウもそれは信用が出來ぬ、餘り早いとか何とか云ふ評も大分見えましたやうにございます、殊に横濱の英吉利新聞に或る亞米利加の醫者が非常に其事を疑ッて出して居ることがございましたが、是は專門學者の本當の專門の奧意を解せざる門外漢の說でございます、苟も自分の專門として居る所を守ッてサウして研究するからには、十分責任を負ッて世の中に出て居るのでございますからして、無責任の事は私も申さない、それで先づ斯ういふ事を研究する前に何時でも考になることは不明の傳染病がございましたなれば是迄分ッて居る所の傳染病の症狀及是迄其病氣に就て調べて居る病体解剖の症狀が似て居るかといふことを考へなければならぬ、先日出發に際して帝國ホテルで皆さんから離盃——送別の宴を開かれました時に、私の知己の人等に其時私は話をした私の考へでは是は——ペストと云ふ病氣は病体解剖上是迄分ッて居る病体解剖上脾脫疽に一番似て居る、私の考のみならず、獨乙の大家ウヰルヒヨウが云ッて居る、今一つ似て居るのは馬に來る馬鼻疽にドウも似て居る、腺の腫れ安排から何からドウも能く似て居る、此二ッの病氣は皆さんも御存じの通り脾脫疽には脾脫疽の黴菌があり、馬鼻疽には馬鼻疽黴菌が原因になッて居ると云ふことは、二十年以來分ッて居る話であります、ペストも或は此方に似て居る所の病氣——總ての症狀からすれば似て居るから之を穿

鑿するにも脾脱疽或は馬鼻疽を穿鑿する方針を取ッて穿鑿しなければならぬといふことは第一に考を付けなければならぬ、脾脱疽を穿鑿するにはドウする、脾脱疽の黴菌は脾脱疽患者の血液を調べるのが第一着、ソレから馬鼻疽はどうかなれば馬鼻疽血液の中にありませぬ、けれども腫れて居る腺腫の中に其の黴菌がなければならぬ、脾脱疽に似て居れば血液の中にあるだらうと云ふ考を以て居らなければならぬ、私が彼方に參りまして研究を初めますにも、一番に目的とした所は血液を撿しますのを一番の目的とした、第一に病人の屍体を解剖した時分には血液を見、ソレから脾臓を見其外ペストに何時もある腺腫を取ッて見れば澤山の黴菌が其中に居りました、皆居りましたが是は解剖する迄に時間が隨分長く經ッた——十一、二時間たッてから解剖したことでございますから、アノ暑い處で死んでから十一、二時間たてば腐敗黴菌と云ふのが總て血液の中にも内臓の中にも這入り込みますから、確に之を認めることは出來なかッたソレから直ぐに其日に多くの患者から血液を取ッて調べて見ましたが、血液の中に一種の黴菌の居ることは其日に直ぐに認めました、血液の中に黴菌の居るのは傳染病中餘計にはない、是迄ある所の傳染病の中では漸く二ッ外ない、先刻御話した通脾脱疽の黴菌は脾脱疽の病人の血液の中に居る、それと歐羅巴殊に露西亞に流れ行る處の復歸熱の患者の血液の中に一種のスピローヘーテンといふ螺旋狀の黴菌が居る、此二つの病氣より外に是迄人の血液の中に黴菌の居るを見出したことはない血液の中に黴菌が居れば其黴菌は既に怪し

い所の不思議の血液と見なければならぬ、ナゼかならば死んだ後でそれを見出すならば腐敗黴菌が血液の中に居ることがありますが、活きて居る中に血液の中に――凡て黴菌學上の注意に依ッて血液を取ッた處の血液の中に物が居る以上は其物は必ず何か病氣に關係のあるものじやと云ふことは考を付けなければならぬ、所がペスト患者の血液の中に一種の黴菌が居る、其黴菌の形は別室に陳列したる顯微鏡に掛けてある「血液標本」と書いてあるのを御覽なさッた通り、二つの斯う云ふ風にあッて居る黴菌其中央が能く染めても分りませ



ぬから、丁度ミクロコッケンを二つ寄せて繋いだやうに見える、兩方の端が大變能く染んで中の處が染みませぬから丁度此物は二つのやうに見える、それを能く氣を付けて見ると此二つの物が一つの被包から被はれて居る、此事を黴菌學上でカフセル莢囊と云ふ、此處を能く注意して見まするど茲にも薄く膜が張ッてありますか、是は能く注意して見ないと分りませぬ、此處にも膜があッて此間は染ッて居りませぬから二つのやうに見える、それを腺腫の方を取ッて御覽なさると能く分る、同じ黴菌、元と斯ういふやうな黴菌でございます、斯う云ふやうな黴菌で血液の中に這入り込んだ時は血液は餘り宜い培養基でない、血液の中に數も餘計ない、發育が大變惡るい、併し腺の腫れて居る所では立派に發育して居る、サウして多くは是は皆善く染んで居る――あすこにある通り赤く染んで居る、併し此中の幾分は兩方が染んで

ペスト病の原因取調べに就て

中丈染まぬのがありますが腺の中に居る時は皮膜が能く切れて染んで分ッて居ります、併し血液の中では幽か外分りませぬから丁度二つになッて居ります、此黴菌は是迄ある黴菌に似て居る黴菌かと云へば是に似て居る黴菌は随分ある、第一肺焮衝を起した時に來る處の啖の中にある肺炎菌と云ふ形に粗は似て居る、第二には鷄の虎列剌の黴菌に能く似て居る、それで此黴菌を血液の中に見出しましたならば果して此黴菌は肺炎菌と同じ種類で該菌が誤ッて血液の中に這入ッて居るか、或は鷄虎列剌の黴菌も是迄撿索が屆いて居りますから其區別を立てるのは極く易い、黴菌を培養して見るか或は血液か内臓の一片を取ッて是が鷄虎列剌の黴菌なれば鳥に植えて見れば直く分る、例へば鷄、鳩若くは家鴨などに植えれば鷄虎列剌に感じて死にます、それで私は之を取ッて鳩に植えて見た、鳩に植えて見た處が鳩は少しも之に感じない——何週間たッても鳩がピン〳〵して居る、純粋培養のを取ッて植えても一部分の内臓を取ッて植えても感じないそれで、鷄虎列剌でない、似て居るけれども區別のあるといふことはモーそれで診斷を下しても宜しい

第二にはフレンケル氏の肺炎菌に似て居るかといふことを見なければならぬ、それをするにはフレンケルの菌は培養基に發育することが甚だ惡し、唯血性或は寒天に發育しますけれども第一第二迄位の發育で第三第四になると極く僅に發育して、發育したのみで動物に植えても一向動物は感じない所がペスト黴菌はどれ丈發育して、どれ丈の培養基を換へても十分發育して、第十回目の培養基

から取ッても矢張り鼠に植えても兎に植えてもモルモットに植えても其動物が十分に此黴菌に感ずるデ、其邊の區別を以てフレンケルの黴菌と異なると云ふことは分る、サウなれば外の黴菌——是迄分ッて居る所の傳染病の原因なる黴菌に似て居る物はない、サウすると此黴菌は是迄ない所の黴菌で、ペスト患者の血液の中にあッて動物に向ッても矢張り一種の毒性を逞うする處の黴菌といふことが分ッて來た、又状に就ては十分に黴菌の性質を調べなければならぬ、此黴菌の性質を調べる前に此黴菌がいつもペスト患者の血液の中、ペスト患者の内臓の中に常にあるかといふを一つ調べて見なければならぬ、ソレをするには多くのペスト患者の血液を調べなければならぬ、私が報告をしまひたまでに調べましたので丁度三十名の患者を調べました、其後二十名程患者を調べましたから都合五十名程患者を調べて見ました、ペストに罹ッた者を診斷して見てもペストに違ひないといふのは第一に熱の發し具合を見てペストに違ひない、第二に何處かの腺が腫れて居る處の患者サウして其患者の血を取ッて顯微鏡で見ますると何時でも此黴菌が居る、併し此血の中には前申しました通り大變餘計には居らぬ、或る患者の血液よりはプレパラートを六枚も作ッて漸く一つか二つ見出すことが出來る、兎に角ペスト患者でありさへすれば此黴菌のないことはない、併し五十名程の患者の中で五名には遂に見出すことが出來ませぬでございました、其五名の中二名はペストでない病で、後でペストでないと云ふことが分ッた、それで三名の患者は之を見出すことが出來なかッ

た是は或はマダ探しやうが十分でなかッたか知れませぬが兎に角五十名の中四十五名見出したと云へばモー是は間違ひない、それから十八名程青山氏が解剖しましたが、其中或は二人程はペスト患者でなかッた、私が其度毎に調べましたのが十六名解剖した者に就て調べました、其十六名の中には本當のペストで死んだ患者でありましたから皆んなあッたのです、十六名の患者の中には腺の腫れて居る中の腺を少々ばかり切ッて顯微鏡に掛けて見ると純粋培養といふ人工で培養發育したやうに餘計居る、それは彼處の顯微鏡の「腺腫ノ標本」と書いてある顯微鏡を覗いて御覧なさッた御方は御分りでございませうが、是は何時でも缺けたことはない、脾臓を解剖して見ますると外觀上大分大きくなッて居る、サウして脾臓を少しばかり切ッて——中から取ッてプレパラートを拵へ顯微鏡で見ると矢張り脾臓の中に黴菌が一緒に集ッて居る——十も二十も集ッて居る、彼處に青く染めてある、御覧なさッた通り……それから其外腦の中肝臓の中腸の中にもある、其外身體中に此黴菌が廻ッて居らぬ處はない、それで一と度ペスト患者の死んだのを解剖して見れば實に是丈黴菌が十分に回ッて居れば是は助からぬ、迚も助かる見込はないといふ位に——諦の付く位に能く黴菌が身體中に蔓延して居る、其黴菌が何時でも同じやうにあッて、之を純粋培養して見ますると同じ黴菌が出て來ますから之を以て此黴菌がペストに密着の關係あるのみならず、ペストの原因であるといふことはモー黴菌學上で十分に是は確乎たる斷定を下して間違ひないと信じます、それから此黴

菌は黴菌學上で何時も今迄分らなかッた、黴菌を調べた時に其黴菌が此病氣と密着の關係を爲して居ッてさうして何時も間違ひなくあッて是が其病氣の原因であるといふ斷定を下しますに黴菌學上三つの原則がある、其第一は此黴菌が何時でも其病體に居らねばならぬ、則ちペストになれば此黴菌は何時でもペスト患者の血液内臟の中に居らねばならぬと云ふのが第一

第二には外の傳染病の是迄知れ渉ッて居る傳染病に此黴菌が居らぬと云ふことを確めねばならぬ、私が今御話をした黴菌はペスト患者には常に居る其外の傳染病患者には一も居らぬ、似て居る者はありますけれども先刻申しました通りソレ丈の區別は立派に黴菌學上付きますから決して外の傳染病に來ないと云ふことが分る

第三には此黴菌を人工で純粹培養するか或は此黴菌のある血液を取るか或は内臟を取ッて之を動物に植えて見て動物が同じやうにペストに感ずるのである、此三つの者が揃ふた以上は其黴菌がペストの原因であるといふことは疑ない證據である是迄分ッて居る脾脱疽の原因とか破傷風の原因とか或は虎列剌の原因とか云ふものも皆此三つの原則に依ッて病の原因であるといふことは確められて居りますから此ペストの血液其外内臟にある此黴菌は三つの原因を具へて居りますから此黴菌はペストの原因たることは疑を容れぬで宜しい、ソレから此黴菌の一體の人工の培養基に發育する模樣は餘り專門學に渉ッて諄々しうございますから茲では御話を致しませぬ、

ペストといふ病氣は皆さんも御存知の通り昔十四

紀世の時分――西暦十四世紀の時分歐羅巴亞細亞の方に流行ッた病氣、ソレで其時は何千萬と云ふ人が其爲めに死んで居りますが其後に至ッてペストはマルで世界に跡を絶ッたやうに無くなッて仕舞ッた丁度今から三十年ばかり前二十四五年前に一と度アストラハンに流行りましたが之は僅かの間で消滅して仕舞ッた、其時分に歐洲から之を研究に往ッた人がありました、それでウヰルヒヨウのペストに就ての話にペストの病體を解剖して見れば先刻御話した脾脱疽に能く似て居るから、脾脱疽は脱脾疽黴菌であるからペストにも必ず何か一種の黴菌が居るに相違ないと云ふことはウヰルヒヨウが前から豫言して居ります、今こそ吾々は見付け出さぬけれども後來ペストが再び世の中に流行ッたら後來進んだ所の學問を以て必ず見付け出すに違ひない、此ペストは黴菌が其原因であるのであるといふことは自分が斷言して間違ひないと云ふことをウヰルヒヨウが言ッて居る、流石ウヰルヒヨウ其人で此時ペスト患者の内臓の中に何か其物がなければならぬと云ふは其病體解剖上の症據がドウしても脾脱疽に能く似て居るから脾脱疽の黴菌の作用であの通りの病體解剖の症狀を現はすから是もサウだとウヰルヒヨウが言ッて居ッた其後に至ッてペストが歐羅巴に跡を絶ッて仕舞ッて歐羅巴の學者はペストは世界から無くなッたと思ッて居ッた、随分歐羅巴の學者にしては餘り眼識のない考を起した、なぜかならば世界の中にはマダ歐羅巴のみならず、亞細亞のやうな大きな國があッて亞細亞と云ふ國には則ち廣い支那國があッて、支那國の病氣は何も分て居ることで

はないけれども、歐羅巴になかッたから歐羅巴人がマルで世界からなくなッたと思ッたは大きな間違ひ――それで歐羅巴殊に獨逸の醫書を繙いて御覧なさい、新らしい書物にはペストのことが書いてない、ペストは吾々が注意しないで宜いと思ッて居ッたがナカ／＼サウは往かずして支那には始終潜伏して居ッた、支那でペストのことは支那の書物には瘟疫と云ふのがペストのヤウであり升、始めて支那の醫者に逢ッて其事を聞きました、瘟疫と云ふのはペストの事を唱へるのだと云ふ事を支那の醫者が云ッて居る、所が此瘟疫は支那の南部雲南地方に於て毎年あッた樣子、昔から今日迄絶えた事はないと支那醫者は言ッて居るそれから雲南地方は、廣東あたりからは交通が便利でございませぬから、廣東地方に是迄襲ッて來ないが、段々毎歳宿送りをして來て、遂に廣東に來たのは能く分りませぬけれども、委く調べて見たらば既に昨年の秋頃から廣東に這入り込んで居るらしい、併ながら英吉利醫者が廣東に在ると云ふことを見出したは、今歳の春です、兎に角廣東に這入ッて來ましたから、廣東から香港の間と云ふ者は毎日朝晩蒸滊船が往復して居りまして、サウして六時間位で着きますから、是が廣東に這入ッて來れば香港に來るは當然である、それで廣東に來たのは春で、香港に這入り込んだのは四月末頃、所が香港に這入ッても固より支那人が多數此病氣に罹ッて居ッたが、英吉利の醫者は一向氣が付かなかッた、然るに此春になッて香港の支那人の死亡數が非常に殖えたそれで、急に氣が付いて段々調べたら一種の傳染病であッて、是が殊に支那人中

に流行ッて居ると云ふことが分ッた、それから段々調べて見たら昔の書物に書いてあるペストに能く似て居る症狀と云ふことが分ッて來た、英吉利醫者は驚いて仕舞ッた、それから廣東に往ッて本元を匡さうとして往ッて見たが、廣東の支那人はナカ／＼外國の醫者に診察せしむることは思ひも寄らぬことで、英吉利醫者は殆んど打殺されるやうな目に遇て匆々に歸ッて來たやうな有樣、所が香港に歸ッて見ると益々激しくなッて、非常の勢であッた、段々調べて見るとペストに違ひない、所謂此ペストの中にも色々な名がある、今、日本で俗に新聞抔に書いてある黑死病と云ふのは矢張りペストの一の症狀から付けた名である、獨逸でシユワルツエペスト、ブボーチンペストと色々ありますが、今流行るのは所謂ブボーチンペストと云ふ奴、併ながら昔からあるペストは皆是であッた、唯症狀の弱いのとヒドク激烈に來るのとで色々の名がありますが黑死病と名を付けたのは今日のペストでは能く分らぬ、其頃の黑死と云ふ名を付けたのは大變身體が早く黑くなッて仕舞ふとか何とか云ふやうな事で付けたらしいが、今度のペストを調べて見ると其邊の所は靑山君の報告に載りませうが、ドウもドウ云ふ譯で名を付けたか分らぬ、或は死んでから所謂死斑と云ふのが——紫色になッて黑み掛ッたものが通例の病氣より早く來たやうにあると云ふことを云ふ人もあるが兎に角其邊の所から名を付けたか、或はヒドク齒齦に出血があッて、口の周りが黑くなるとか、舌が黑くあるとか、舌苔を帶びるとか云ふやうな症候から付けたか知らぬが、兎に角黑死と云

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

ふ名を付けたのは能く分らぬ、今度のペストでは黒死と云ふ名義は當て嵌ッて居らぬ、所謂ブボーネンペスト腺腫ペストと名を付けるが一番適當して居る、サウして香港にサウ云ふ具合にして起ッて參りました時に香港の醫者も大變に驚いて、直ぐに段々調べて見ると潜伏期は僅に三日位で、ドシ／＼發病する、發病すると二日か三日でみんな死して仕舞ふ、一時始まりたては百人の患者の中にて八十人は死に居ッた、即ち八十プロセント丈け死に居ッた昔からペストは八十プロセント丈け死ぬと云ふことが書物に書いてあるが、今度の香港のも八十プロセント位死んで居ります、又黒死病の起り方と云ふ者は第一にヒドイ熱が來る、其熱と云ふ者は或は其前にヒドイ頭痛を發するとか或は其前に腺が腫れて來る、多くは其發熱とそれから腺が腫れると云ふのが專らペストに缺くべからざる症候であります、其外大變熱が發して來ますから直ぐに人事不省になッて、譫語を發してそれからヒドイ舌苔が付いて來る、或は又下痢嘔吐杯を催すことも稀にはありますが、今度の香港のペストには下痢嘔吐を催すのは極く稀でありまして、下痢嘔吐を催すのは豫後が惡るかッたやうです、所で起りは三日か五日位の潜伏期で皆起ッて居るそこで、純粹のペストの爲めに死ぬのは三日位で死んで仕舞ふ、それから一週間活き延びればペスト患者は殆んど快愈と云ッて宜しいペストの熱は一週間位しか續かぬ一週間位は熱は四十度内外で朝から晩まで高く續いて居るが、八日位になりますと漸々に下がる、それで純粹のペストの經過は八日位で、八日目から熱が段々下ッて人事

ペスト病の原因取調べに就て

不省の者が元に復ッて來る、サウなると回復は却ッて早い、現に同行の石神君のペスト杯も純粹のペストの經過であッて、一週間熱が續いてそれから其後熱が退きまして大變に經過も早く回復も早うござりました、靑山君の方は外の色々の症狀が起り、或は肺焮衝を起し、心臟に障りを起したのと其外敗血症の症狀を起したので、大分長引きましたが、矢張りペストの熱は八日目に下ッて來ましたそれで、此ペストは一週間活き延びれば外の激烈な餘症さへ發しなければペストで死ぬものはないといふことは今度十分經驗した英吉利の醫者は言ッて居ります、成程ドウモサウらしい、ソコデ前に御話しました今黴菌がサウ云ふ風にして來た所の病人には必ずあるのです、必ずあるが、初期の中にはドウしても血液の中から見出すことは餘程難い、現に靑山氏の罹られた時に恰度六月二十八日の晩に客をしまして、其晩に少し――晝頭から腺が痛いと云ふことを言つて居りましたが熱もありませぬから客の席に出て居つたそれが濟むと熱が少し出たと云つて計つて見たら卅八度、翌又計つて見たら四十度の熱になつて居ッた、ソコで少し怪しいと云ふので直ぐに血液を取ッて見た處がどうしても見出さなかつた極く初期にはナカ〱見出すことは六ケ敷い、然し二日目には靑山君の血液の中に立派に黴菌が顯はれて來ました、それで一番初は少し熱が上つて腺が腫れた位の時に血液を取つて診斷すると云ふことは難い、血液を取つて見て極く初期の患者の血液中にペスト菌がないと云つても決してペスト患者でないと云ふことは言はれませぬ、併しそれに反して腺の

中から取つて見ると初めの時から腺の中にて來て居る、それはナカ〳〵初め腺の腫れた時分に取ると云ふことは——腺を傷けると云ふことは隨分殘酷の事ですからナカ〳〵出來ませぬけれども、隨分或る患者では說諭をしますと小さい注射器か何かで少しばかり血液を取つて見るも別に痛くありませぬから承諾致します、サウして取つて見ますと腺が少し腫れて居るので腺の血液を取つて見ると隨分餘計ペストのバチルスが居る、それで腺の腫れた時には腺の中にペスト黴菌が回つて居ると云ふことは著しい、けれども血液の中に來るのは少し後る、熱を發した後でも稍やく一日か二日を經つた時でなければ血液の中に見出すことは出來ない、タマサカ見出しても數が少なうござりますから、是は餘程注意して見ないと見えない、同時に純粹培養基に人工培養をして見れば能く發育をする、此中に居りさへすればそれで血液試驗で診斷を下すこともサウ難い事ではない、それから今一つ御話しませねばならぬのは今申した通り黴菌を見出すことは一番始めは難いが後になつては黴菌がナカ〳〵退かぬです、回復期になつてからでも大概二週間や三週間位は矢張り血液の中に黴菌が止まつて居る、回復期になつた患者の血液或は腺を取つて見れば、何時でも矢張り黴菌が居る、茲に一つ大變後來之を研究するに面白い事があるのです、此黴菌と云ふものはペストに罹れば免疫をする、其試驗は今私は此方で始めて居りますから結果は確かに申すことは出來ぬが、大体の成績を得ますれば又御話をする機會がありませう

と思ひますが凡ての黴菌が――マア多くの黴菌は免疫をすると云ふことは分つて居る、虎列剌のやうな者でも一週間虎列剌に罹つて持堪へが出來ますれば餘症を發しなければ助かると云ふことも皆樣御承知、然るに虎列剌でも一週間の後に大便中に虎列剌の黴菌がないかと云へば決してサウでない、澤山居る、併し其人と云ふ者は其黴菌に慣れて居るからどれ丈黴菌が身体に居つても、一向感じない、それと同樣でペスト黴菌もサウです、三日四日間は此黴菌が非常の働をして殺す程の力を以て居るが、一週間此黴菌に抵抗が出來た病人ならば、ペストの爲めに死することは極く稀である然るに今申す通り三週間經ッても血液の中には澤山居る、腺腫中にも澤山居る、所が其人に向ッては何ともない、如何に黴菌が發生して居ッても此人は黴菌の爲めに害を蒙らぬ、外の傳染病同樣ペストも早く免疫すると云ふことは分る、後來動物試驗をすれば此ペスト黴菌に感ずる動物は早く免疫さるゝと云ふことが出來るであらん然るに其病人に向ッて回復期の黴菌は病人に害がないが、其病人の血液或は腺腫から取ッて純粹培養をして動物に植えると其動物は直ぐにペストに罹る、故に其黴菌は其人に向ッては働を失ッて居るが新らしい他の物に移ると矢張感染の働を持ッて居る、夫れ丈の實驗は私が彼方に居ッた時分に動物試驗をして來ましたが、此黴菌は動物にも早く免疫をするかドウかと云ふことは是から先の試驗の成蹟で分ります、若し果して動物にある是迄の免疫をする仕方に因ッて、ペストの黴菌を以て動物の免疫をさせるとが出來たならば、或は免疫の法

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

を以てペスト患者を早く免疫させることが出來る、所謂黴菌學上の治療法と云ふものが此ペスト豫防法に付ても出來ると云ふ望を私は持ッて居る、此ペスト黴菌は幸にして夫のスポーレン即ち芽胞と云ふのを拵へぬ、是迄色々芽胞を拵へさせる法は黴菌學上で色々培養基で芽胞を拵へることが出來る、其方法を遣りましたが、是は拵へないからして豫防撲滅上に幸の事であッて、此ペスト黴菌の芽胞がないと云ふことは、若し是が脾脱疽の如く芽胞を拵へると之を豫防し撲滅することが非常に困難であるがソレがありませぬから案外豫防し撲滅することが易く出來る、ソレで如何ある法を以ても是迄は芽胞を拵へさせることが出來ませぬ、此後或はドウかして芽胞を拵へるかも知れませぬが、私の是迄の實驗では此黴菌は芽胞を拵へない黴菌と斷案を下しても差支ないと思ふ、何せかならば此黴菌自体に付ても其通り、鷄虎列剌の黴菌も凡て芽胞を拵へない、ソレからフレンケール氏の黴菌も決して芽胞を拵へない、此種類のもので芽胞を拵へないものがない。

此黴菌を取ッて消毒藥に入れて見ると今迄通例知れ渉ッて居る所の石炭酸水か或は石灰水に入れて見ると――其入れると云ふは此黴菌を培養基に十分發育させて即ち肉汁の流動體の培養基中に十分發育させて、一定の石炭酸或は石灰を入れて見ますれば、ソレ〲感ずる、感じ方と云ふものは殆んど腸窒扶斯の黴菌の感じ方位に早く感ずる、即ち石炭酸でありますると半プロセントの石炭酸に二時間も漬けて置けば十分殺されて仕舞ふ、石灰でも一プロセントならば二時間で十分殺されて仕

辨ふ譯であるから丁度虎列剌黴菌より少し抵抗力が強い位、其外濕度に之を合せて見ると攝氏の七十度から八十度位の濕度であれば二十五分か三十分位で全く撲滅することが出來る、それからッベルケル、バチルスと同じことで太陽に當てると非常に感じが強い、純粹培養でも或は少しばかり布に塗て置くか或は腺腫の中の菌を取ッて太陽に當て、三時間も乾かして置くと、悉く死ぬ、それから又光線の非常に照す部屋の中で空氣中に乾かしても三日も乾かせば四日目位には大概死にます、サウ云ふ風に理學的化學的のものに對しても隨分抵抗力の少ない黴菌であるから、之を撲滅する方法は大變易い、ペストは激烈の病氣に違ひない、併し其性質が分ッた以上はサウ恐ろしくない之を撲滅する方法は案外容易く出來ます、夫れから動物は先刻申した通り一番能く罹るのは鼠です、鼠は南京鼠、家の鼠、溝鼠でも總て鼠の種類はペストに感じ易い、現に香港で大變鼠か死ぬ、夫れ殊にペスト患者のあッた家では非常に死ぬ、夫れで或は此鼠にもペストのバチルスと云ふものが移るのであらうと云ふ疑を起しまして、死んだ鼠を調べましたが——尤も手に入ッた鼠は暑いので大概腐敗して居ッたら、外の腐敗バクテリヤが居ッて調べるに困難した、今死に掛ッて居るビク〳〵して居る鼠を手に入れて、夫れを調べたアスコの顯微鏡の標本に「鼠の血液」と云ふのが夫れです、其中に矢張ペストの黴菌と同じものが這入ッて居る、あれから培養したと同じものが出來て來た、夫れで鼠は植ゑて出來るのみならず、矢張天然に因ッてペストに感ずると云ふことも分ッた

其外モルモット通常吾々が動物試驗に使ふゲチヤ鼠、アレが罹り易い、それから通例の南京兎――併し鳥類は先刻申す通り鳩の如きは一向感じない、動物に之を植えて見ますと動物は固より早く感じますから、腺腫を發すると云ふやうな事はありませぬが、植ゐる所の周圍がマルで脾脫疽に罹ッた動物の通りである、それとペスト患者を解剖して見るとペスト患者の腺の冒されて居る腺腫の周圍と云ふものはマルで肉も組織も水腫を帶びて黑赤くなッてウジヨ〳〵して居りますが、其中にペストの黴菌が非常に居ります、動物に試驗しても其植ゐた周圍はペスト腺腫の周圍と同じくソコに黴菌が非常に發育して居る、ペスト患者の內臟の諸器械の中にはバチルスが澤山居つて見ることが出來る、それから人の身体にペストの黴菌がドウして入るかと云ふことは是又之を豫防し撲滅する即ち豫防上に大變な必用の問である、皆様御存じの通り腸窒扶斯の黴菌、虎列剌の黴菌はタッタ一つの道を取る、消食器即ち口から這入つて胃、それから腸に往く、併し胃の健康の人は虎列剌に罹ることは殆んどないと言つても宜い、と云ふものは胃液の爲めに殺されるから腸迄黴菌が往つて働けないから胃が本當に十全健康の人ならば虎列剌を免かれることがある、併しペストに至つてはナカ〳〵サウ往かぬ、此ペストハ消食器から這入るより寧ろ外の道から這入る、即ち第一に呼吸器から傳染する、其證據は塵芥中にペストの黴菌があつてソウして其黴菌を吸入して、サウして感ずることが多くある、今度香港でも其例と云ふものは隨分多うございます、（以下次號）

衛生叢談

◉長壽者來歷

◎徳島縣管内在住者にして百歳以上に達したる長壽者の來歷左の如し

板野郡大山村　岡田むね

生年月　寛政三年四月四日生(百四歳)

職業　農を業とす明治二十年頃より體力衰へ常に家居して日用の炊事を執れり

家屋の位置及構造　土地高燥人家稀疎にして稍々清潔の地區あり其家屋は間口五間奥行三間の藁葺平家建にして南に面し空氣の流通最も宜し

衣服　常に清潔なる綿衣を着用す

起居動作　早朝に起き必す多少の勞働を爲し而して後食に就く食時は毎に一定し定食外の食啖を爲さす起臥の時間も亦一定す性質淡泊にして事物に拘束せられす身體健康薬を用ひたることなし頗る軍談、演劇等を好む

五感　耳目其他異狀なし

飲食物　米麥飯を常食とし食量は普通にして定時に食に就く頗る烟草を好めり飲料水は井水にして水質宜し

血族及配偶　父六十一歳、母九十二歳にして死亡す兄四人姉一人ありしも皆死亡せり本人は四十歳にして嫁し七十六歳にして夫を亡へり

貧富の度　夫は醫を業とせしも死亡後農業に從事し地租三圓を納め村内中以下の生計を爲せり

美馬郡江原村　正木その

生年月　寛政四年正月二十日生(百三歳)

職業　平素農を業とせしも明治二十四年一月頃より身體麻痺のため執業すること能はす爾來一日三十目の絲紡を爲せり

家屋の位置及構造　土地平坦人家稀疎空氣の流通宜し家屋は間口七間奥行四間の草葺家根平家建にして南面せり居室は東北の奥座敷五疊を以て之に充つ

衣服　平素綿衣を用ひ絹衣を好ます清潔なるものを著用す

起居動作　毎朝早起一定の時間に寢に就く食時は常に一定し定食の外飲啖を爲さす身體强健にして藥用せしこと少し然れとも明治二十四十一月の頃石に躓倒れ筋骨を打ちしためか半身麻痺し動作自由ならす

五感　前項麻痺のため耳聾し歯は完全にして壯者に異ならす視力稍々鈍し

飲食物　常食は米麥甘藷等にして食料は通常なり酒及烟草を用ひす飲料水は用水にして水質不良ならさるも亦純良ならす

血族及配偶　父八十二歳、母九十歳にして死亡せり弟一人妹一人あり二人とも健全なり本人は二十歳にして嫁し七十五歳にして夫を亡へり

貧富の度　本人か嫁したる當時は中等以上の資産ありしか夫長病のため財産を減したるも今尚は山林耕地合して一町歩歩を有せり

上八万村　佐々木伊勢吉

生年月　寛政六年十月十五日生(百一歳)

職業　農業を専務とし農間山林に入り木樵等の業を執れり

家屋の位置及構造　山間にして平坦より稍々高き

山腹に在り四隣山巒東南に面し人家稀疎土地高潔空氣清良なり其家屋は間口五間奥行三間半の木造平建萱葺にして前後庇瓦葺座敷十坪五勺土間七坪にして清潔なり

、、衣服　絹布を好ます平素綿衣を着し時々洗濯清潔を好めり

、、、起居動作　朝は未明に起き夜は暮に寝ね多事の時は夜業を執ることあり一日四度の食事を缺きしことなく他に間食を好ます壯年より無病健全にして未た藥用灸治を爲せしことなし勞働不斷閑居を好ます偶々見物又は神佛參詣等のため外出するのみ今より四年前まては農事に勞働せしも爾後は家内にて繩及莚履物等の藁仕業を爲し或は村外草刈等の業を執りて怠ることなし性寡言にして活氣あり諸事人後に就くを好ます

、、五感　四肢五官共に異狀なく健全なり再昨年頃よりは聽力稍々衰へたるのみ

、、飲食　常食は麥飯にして他は甘藷、野菜等なり常に食事多量にして惡食あることなし酒及餅を好み殊に麵類を嗜食す酒及餅等は一度に各々五合位を食し素麵の如きは一度に二百五十目許の量を食す且つ烟草をも嗜好せり飲料水は溪間の湧水にて極て善良なり

、、、血族及配偶　父八十二歲、母七十九歲にて死亡し兄弟に弟三人妹一人ありしも孰も夭折せり二十五歲にして妻を娶り三女を擧け妻は同齡なりしか八十九歲にて死亡せり

、、、貧富の度　少壯より中年の頃まては些少の財産を增し田畑六段歩、山林五段歩程を有し相當の家計を爲したるも一家不幸諸事不如意にして僅少

の財產も漸く消滅し現時は宅地家屋等を有するのみ生計頗る困難なり

板野郡御所村　近藤直吉

、生年月　寛政六年八月十六日生(百一歲)

、職業　少壯より農業に從事し現今に至るまで一日も閑居したることなし

、家屋の位置及構造　土地高燥人家稀疎西北は山谷を帶び東南は廣野に面し頗る清潔の場所なり家屋は間口六間奥行五間總瓦葺二階造にして居室は東南隅の表座敷八疊を以て之に充てり空氣の流通宜しからず

、衣服　清潔なる綿衣を好み更に絹布類を用ひしことなし而して著用の外敢て一點の餘衣を保つを好ます

、起居　毎日未明に起き夜は家人に後れて寢に就く寒暑を厭はす年一日の如く農業を強勵せり十年以前疝病に罹りたることありしも二年許を經て治癒したり其他疾病に罹りしこと及藥石を用ひたることなし今尙は杖を用ひす頗る壯健なり

、五感　齒は僅に上顎に二枚の存齒を存するのみにして其他は異狀なく恰も小壯の如し

、飲食物　常食は麥飯及甘藷にして醬油の搾り粕生味噌等を下物とす食量は三餐とも普通の四椀半を食す未た曾て酒及烟草を用ひたることなし飲用水は井水にして其質極て淸良なり

、血族及配偶　二十八歲にして妻を娶り婦も弱體なれとも今尙は存生せり其他は不明なり

、貧富の度　耕作を業とし地租七圓四十二錢九厘を納む村内中以下の活計を爲せり

徳島市富田浦町　寺井つる

、、、生年月　寛政六年二月十八日生（百一歲）

、、職業　十七歲の比より縫機を善くし一家の衣類を造るを常務とせしも九十一歲の比より視力衰ふるに至れり

、、、、、、家屋の位置及構造　土地高燥ならさるも東南園圃に接し垣外の田野に連り開濶なり然とも北西の二面は人家稠密の地なり家屋は瓦葺二階造にして間口七間奥行之に適ふ居室は南方に面し常に清良の空氣流通す

、、衣服　常に綿衣の清潔なるものを著用す

、、、、起居動作　毎朝未明に起き邸内の菜園を消遥したる後食膳に就くを例とす

、、、飲食物　常食は麥飯にして美食を好ます且つ少食なり九十歲の頃より食慾稍々進みたるも身體は却て少しく瘠せたり當時は專ら湯漬を好み暖食を欲せす其他嗜好なし

、、五感　耳稍々遠く視力亦九十歲比より衰へたるも對談に支障なし齒は少しも脱落せす齒力の强きこと壯者に異ならす

、、、、、血族及配偶　父五十歲、母八十四歲にて死亡し兄二人ありたるも既に死亡（年齡未詳）せり本人は二十一歲にして嫁し五十五歲にして夫を亡へり

、、、貧富の度　多少の財産を有し中等以上の生計を爲せり

（以下次號）

㉑北里青山両博士歡迎會

北里、青山両醫學博士は本年六月黑死病探撿の命を奉じ幾多の艱難を排し不測の危險を侵し遂に其全效を收め一行恙なく歸朝せらるゝを得たり是れ醫學上の名譽のみならず又本邦文運の光輝を宣揚して世界萬國に遍照するものと謂ふべきなり玆に

於て朝野の有志者は十月十四日を期して盛大なる歡迎會を催はし兩博士に銅像を贈呈し其一行諸君に頌功狀を贈呈するよしなるが今や準備も略々整頓し歡迎委員長の名を以て府下及各縣の有志に案內狀を配送したりと其數の多き殆んど三千通に至りしといふ以て其盛大なる想ふべきなり

◉從軍夫卒の救護

我海陸兩軍は今や千里天外の異域に戰ひ到る處大捷を得王師の向ふ所殆んど敵なきが如しと云へども此に最も恐るへき疾病の我兵を犯すの一事あるのみ近くはクリミヤの役普佛の戰爭西南の役に鑑みよ痘瘡窒扶斯虎列剌等の惡疫が如何に戰鬪力を減殺せしかを今回日清の戰爭に於て幾多の夫卒彼の地に從軍せるは實に數千の多きに上れり而して軍隊には赤十字社の救護ありて毫も遺憾とする處なしと云へども夫卒に對しては此等の救護なきを以て朝野の國手四十三名は發起となり從軍人夫救護會なるものを組織せんとて目下頻りに評議中なりといふ

◉仁川港在留婦人の篤志

仁川港に居留せる日本婦人下田ふじ子以下十餘名は何れの地なりとも軍隊に從て負傷者の看護に從事したき旨出願せしに旅團本部より有志の婦人五名丈は許可せられ目下萬里倉の病院に働き居るよし實に奇特の事と云ふべきなり

◉防寒の必要品

今回日清交戰の事あるに當り我が義俠博愛なる同胞は軍隊の勞苦を思ひ恤兵部への献納品は實に非常の多數なりとのことなるが軍醫總監の話しによれば今朝鮮にある我兵は無論今年は朝鮮にて冬を

越し段々支那兵を擊ち郤けて行けは行く程北に向ひ寒氣強き處に進むべきを以て我陸軍省に於ては之に對する充分の用意は整頓せりと雖へとも尚其上に防寒の品々を多少によらず寄贈せられなば兵士は勿論數千の人夫に至る迄實に悦ぶことならん云々

雪國にて用ゆる藁の雪ぐつ

雪中草鞋の先へはめる藁のつまがけ

綿入たび　足袋

ふらんねる又は綿入又は毛類の手袋

綿にて造りたるぞうき　綿子

綿類のかぼちや頭巾　綿子のぞうき

もんぱ　ふらんねる

是は一尺五寸位に切りて足をつゝみ其上にくつをはくなり

靴下　下股引　もんぱ又はふらんねる襦袢

毛皮類

是は狐、狸、狢、猫、犬、熊、かも鹿、其外何の獸にてもよし古き品は殊更よし一枚でも二枚でも遣ひ道多し

◉南京虫の發生

深川區福住町芝崎某方には此程より俗に南京虫といへるもの發生し此蟲に螫れて大に困却するよし警察署へ申出でたるを以て早速衛生掛り出張し大掃除を行ひ其害蟲を燒き殺ろし今や全く驅除せしとの事なるが時節柄其名を聞くも憎むべく亦厭ふべし

◉某村と唐辛

唐辛は刺戟性を備ふるものにして多少胃の消化を助くるものなるが玆に面白き一話あり伊勢國某村

にては今度一村舉りて唐辛を食せざることに申し合せたりとか今其理由を聞くに唐辛を食する時は自からカ、、、、ラカッタと云はさるべからず然る時は支那即ち(唐)が勝ッたと云ふことになればなりと落し話しにありそうな事ともあり

◉法印某の養生歌

菜のるいはその時々にとりかへよ
　おなじ品のみ偏に食すな、
食事して直にいぬれば食もたれ
　やがて病になるものとしれ、
食後まづ額に両のほうまでを
　みづから數度なでおろすべし、
食後には縱横數間あゆむべし
　食氣めぐりて養生によし、
食事せば立ちはたらきて時をうつし
　一時ばかり過てねよかし、
食物はこなれやすくてやはらかに
　あぢはひ淡き品のみぞよき、
厚味にて重きはもたれ硬きもの
　冷たるしなも多く食すな、
嗜ばとておなじ品のみしよくすれば
　偏氣つもりて病とはなる、
飽食を數日つゞけばたゝまりて
　つねに大事の病とはなる、
喰度も暫時のあいだこらゆべく
　のちに益あるほどの久しさ、
夏もたゞあたゝかなるを食すべし
　冷物をのみ喰へば霍亂、
百藥の長なる酒はわが分に
　すごして飲は百毒の長、

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

酒のまばほろ〳〵醉をほどゝせよ
其の盃のかずは限らで、
一杯の酒にゑふ人十ばいの
さけにゑへはぬも其人のほど、
饑過ぎて食するときはそのまへに
湯茶か味噌汁とくとのむべし、
食こなし持藥にのみて大食の
人の脾胃處は十倍としれ、
渇くとも湯水はおほくのむなたゞ
口にふくみて數度うがひせよ、
飽食とうえてものくふ時ならば
いり湯はかたくせぬをよしとす、
さなきだに夏は食物こなれわし
冷たるものと過食ばしすな、

廣告

九月より十月に至る入會者左の如し

◉通常會員粟屋榮子の紹介により

佐賀縣尋常師範學校女子部寄宿舍　通常會員　川崎ゆう子

◉通常會員前川てる子の紹介により

第一醫院　増田はや子

轉居

名古屋市武平町庚九十八番戸へ　井原かぞ子
芝區白金臺町一丁目七十一番地へ　河津敏子
麴町區中六番町へ　丘邑嘉代子
麴町紀尾井町三番地へ　津田たま子
四谷南伊賀町四十八番地へ　志賀八重子
芝高輪南町三十三番地森村邸內へ　森その子
春木町二丁目二十七番地へ　伊東つる子
本鄉切通坂町三十八番地龍澤方へ　佐藤とめ子
麴町中六番町壹番地へ　種村たゑ子
麻布龍土町十六番地へ　齋藤はる子

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

私立大日本婦人衛生會規則

第一條　凡本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持するの方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ随て社會全般の幸福を増進するにあり

第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置く

第三條　本會の會員たらんと欲する者は身分の尊卑を問はず何人にても入會することを得

第四條　會員たらんと欲する者は族籍住所姓名を記し本會事務所へ申込ある可し

但事務所は下谷區練塀町四十三番地に置く

第五條　本會々員を分て終身會員特別會員通常會員の三類とし共に會費金を納むる者とす

但終身會員は一時に金拾圓以上を納め特別會員は一年金二圓四拾錢以上を納め通常會員は同金壹圓二拾錢を納むる者とす尤も會員中書生及其他事故ある者は唯雜誌料として同六拾錢を納めしむ

第六條　男子にして本會の主義を贊成する者は之を贊成員とす尤も會費は本會員に同し

但本會に功勞ある者は役員の協議を以て終身贊成會員(無會費)とすると有る可し

第七條　本會に推戴員を置き其中より總裁一名を奉す推戴員は皇族の御息所等に之を申請するものとす

第八條　本會は左の役員を置く

會長一名　副會長一名　幹事七名　評議員二十名　書記若干名

第九條　會長副會長及幹事評議員は會員の投票を以て之を撰舉し書記は幹事の推撰により會長之を命ず

但書記は都合により會員外の婦人又は男子に托することあるべし

第十條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し又は其代理をなし幹事は會長の命を受けて會務を處理し評議員は重要ある會務を評議し書記は役員の命に從て諸記錄及雜務を掌る

但幹事の分課を設けて第一會計　第二編輯出版　第三庶務とす

第十一條　會長の見込を以て右役員外に會員中より臨時に指名委員を置くとあるべし

第十二條　會長副會長及幹事評議員の任期は一年とす尤も再撰するも妨げなし

第十三條　會長副會長及幹事評議員は無給料とし書記は相當の報酬を給す

第十四條　本會の集會は七月八月を除くの外毎月一回として通常第一土曜日午後一時より之を開く

第十五條　毎會學識經驗ある者を聘し講義演說を囑し本會々員の演說と共に之を筆記して本會雜誌に掲載し毎月各一冊つゝ無代價にて之を會員に頒付するものとす

但し演說の間に談話を交ゆる事あるべし

第十六條　會員は家族の婦女子又は知己の婦人を本會々場に誘致して傍聽せしむるとを得

第十七條　本會講義演說の際男子の傍聽を禁ず

但會員に緣故ある男子は此限にあらず

第十八條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす

但些少の金額は日々の費用支出の爲め事

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

明治二十一年二月二十八日内務省許可

務所に引出置を得

第十九條　會計の收支は總て會計課幹事の撿印を要す

第二十條　會員又は會員外より金圓若くは書籍物品等を寄贈あるときは本會より謝狀を送り且寄贈の品目及其人の姓名を本會雜誌に載せ報告するものとす

第廿一條　會費は郵便小爲替にて東京下谷郵便局へ向け振出しある可し

但不得止場合には郵便劵を代用するも妨けなし尤も一割増とす

第廿二條　入會員には會員證を附與すべきに付郵便にて申込の者は郵便劵二錢を添ふ可し

第廿三條　每年三月九月の總會に於て會計の收支庶務の概略幷に會員の增減等を報告す可し且規則改正の案あれば之を議定するものとす尤も議定は總て多數決とし可否半數なるときは會長之を決す

但至急規則の改正を要する事あるときは豫め會員に報して臨時に之を爲すことを得

第廿四條　每年三月の總會に於て役員の撰擧をなすものとす

第廿五條　規則の範圍内に於て役員の評議を以て其細則を設くることを得

第廿六條　各地方にて發起者十人以上ある者は支會を設くることを得

但其規則は本會の規則に抵觸せざる樣起草し本會役員の認可を經へし

第廿七條　本會の集會場は時々報知する者とす

第廿八條　會費金は受領證を付與すべし尤も小爲替又は郵便劵にて納むる者は右受領證遞送費として郵劵二錢を添ふべし然らざれば受領證は送付せざるものとす

第廿九條　入會後轉居する者は速に事務所に通知ある可し尤も死去の節は親戚知友等より通知ある可し

第三十條　退會せんとする者は會員證を添へて其旨事務所へ報知あるべし

明治二十五年九月

東京下谷區練塀町四十三番地

私立　**大日本婦人衛生會**

明治廿七年十月二日印刷
明治廿七年十月五日發行

發行所　東京下谷區練塀町四十三番地　大日本私立婦人衛生會
編輯兼發行者　東京牛込區矢來町三番地　田中徳三郎
印刷者　同　神田區小柳町十三番地　小高良造
印刷所　同　神田旅籠町貳丁目拾一番地　廣業館

明治廿六年四月四日遞信省認可　第一金曜日發行
（定價金拾錢）

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN